福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

伊那小教育を支えているもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 泰俊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7407

伊那小教育を支えているもの

松田泰俊

一　はじめに

昭和３０年代中頃から日本は、高度経済成長の道を歩み、国民の所得は増え、物質的生活は豊かになった。しかし、このこととは逆に次代を背負う子ども達のこころは次第に荒み、学校が荒れ始めた。『学校荒廃』の時代を迎えたのである。信州の小都市伊那の地にあってもその荒廃は目を覆うものがあった。

そんな折り、昭和４３年度、昭和４４年度の２カ年間伊那小学校は県教育委員会から研究指定を受けた。研究課題は『豊かな情操をめざす教育指導の実践』であった。研究に関してのテーマ・内容・方法等は学校にまかせられた。

「情操とは何か」このことを巡って先生方は苦悩する。経過の一旦が伊那小学校百年史に次のように記されている。

> 「情操とは何か」花を作らせ、学校環境をよくすることが教育指導に通ずる実践なのか。新しいカリキュラムを作らなければならないのか。今までやってきた教科本来の立場はどうなるのか。等々、議論は限りなく続けられた。

こうした経過を辿りながら実践を重ねるなかで、情操の育ちによる子どもの姿を『ひとりだちできる子ども（自学の確立）』というところに帰着していった。ここには、子どもを「よい」「普通」「やや劣る」等の段階による量としての評価では、子どもの長所、欠点、つまづきとその原因まで保護者が知ることはできない。と、通知表を廃止し、学期毎の懇談会の充実に務めてきた１０年余の歴史があることを忘れてはならないと思う。

また、先生方は郷土の先達唐木順三先生にその教えを請うた。

唐木順三先生は「情操は心の問題ではあるが、心でとらえることができない。姿でとらえるべきである。情操は心の基底にあたるものではあるが、そのように概念づけてしまうと情操でなくなる。情操を教育指導ということで考えるならば、教室が感情共同体になることではないか」等々（百年史より）の教示があり、伊那小学校の教育目標となる、教育研究の指針ともいえる『眞事』『眞言』『誠』という教育本来のあるべき道を示された。

『眞事』『眞言』『誠』の教育の探究は、子どもの今を深く見つめ、子どもに学び、子どもの求めや願いに学習の出発のそもそもをおく、総合学習へと必然的に向かった。

『眞事』『眞言』『誠』の具現について伊那小学校学校要覧には次のように記している。

㈠『眞事』の教育

・眞事は「事」にある。「事」を貫め立てて、具体的に「事」が何かはっきりさせることが、眞事への第一歩である。

・そのため、教師は素材研究を尽くし、子どもの求めや願いと教師の願いの一致するところに立った題材を導き出すことが求められる。

・その具現のために学年会を重んずる。学年に集う教師は、子どもの側、素材や題材の側から「事」を貫め立てて、研究と実践に努める。

㈡『眞言』の教育

・眞言は「ことば」である。子どもと教師、子ども同士に虚言がなく、眞実のことば、思いやりのあることばをもって接することが第一歩である。

・眞言は「愛語」である。正法眼蔵に『愛語は愛心よりおこる。愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻天の力あることを学すべきなり』とある。正法眼蔵の児童愛に根ざし、子どもの「言(いうにと)」をよく聞き、深く理解し、実(じつ)（本質・眞なるもの）のある自分のことばを貫め立てて指導にあたるべきである。

・そのために、読み合わせ会を重視し、ことばのもつ意味を究明し合うと共に、平常、常に辞書を引き、ことばの感覚を磨くべきである。

㈢『誠』の教育

・『「誠」とは、「ことば（言）が成るんだなあ。」（唐木順三『誠』について、こう動いた。）無心な子どもは、事にあたり計らいの無い言葉、ハッとすることばを発する。こうした子どもの眞の言葉を聞き取り、それを基に指導にあたるべきである。

・そのために、教師は、子どもの毎日の清掃、遊び、諸行事等、常に子どもと共にあり、行動を通して子どもの眞の言葉を聞き取ることがもとめられる。

二　『眞事』『眞言』『誠』の教育（伊那小教育）具現のための実際

㈠読み合わせ

読み合わせは、唐木順三先生の著書を読むことであり、そのことは、伊那小教育の具現、継続、深化させていく根幹としているものである。

歴代の校長が唐木順三先生の著書をどう読み、伊那小教育を考えていたのか、読み合わせ感想文集から探ってみたい。

①酒井源次校長（総合学習を始められた校長　「正法眼蔵随聞記私観」）

・・・「正法眼蔵随聞記私観」を読んで、いつも問題になっていたことは、生命現象の事実を対象論理的に捉えていて、自己自身の内奥の事実

として主体的に捉え得ない一点であった。長島亀之助氏（信州教育の先達「正法眼蔵」の研究者）の死は自分の急逝であり、その現実は今日唯今の自分の姿であることに全く気付かないということであった。蛙の目玉のように目の玉が外に向かってついていて、自分の内側が見えない。伊那小５０何人かの職員ひとりひとりに死の影が漂っている。それが事実となる日は、今日か、明日か、一寸先全く予断を許さないのである。その予断を許すなき今日唯今の互いの生命である。その一点をわがこととして認識できるかできないか。そのことを繰り返し繰り返し私観は説いている。只管打坐も、仏向上も、道は無窮なりとも、その一点の認識に立ち、そこを出発点としてすべては説かれている。その認識に立つところに真の学道は初まり、新しい人間の生き方が自在に展開する。教師が真に子どもを大切にするその新しい生き方が始まる。昭和５３年

②渋谷千広校長（「古いこと新しいこと」）

「何かが片づくと、また何かが持ち上がる。何かが持ち上がり、また片づく。良い方へも悪い方へも、やがて魚がつく。何かが魚をつけてくれる。そう考えることによってなるべく落ち着いていたい」これは、唐木先生「魚（「古いこと新しいこと」の中の一エッセー）」の文章に引用されている尾崎一雄さんのことばである。
ここを読む度に、自分の仕事や身辺のことなどを思いながら、その実感をひしひしと味わっているこのごろである。・・・（中略）事によっては自力ではどうにもならぬものもあろう。しかし、何かが魚をつけてくれる。その何かとは、なんであろうか。
漱石は、大正４年の「硝子戸の中」で、「もう病気は、すっかりお癒りですか、」の問いに対して「病気はまだ継続中です。」と応えるのが例になったと書いている。そして、この継続中は、病気ばかりではない不測の変、狂の爆発、ひいては日常生活における彼対我の自我の衝突、これらもすべて継続中のものであり、実質の推移であるといっている。継続中というのは、実は実質の推移のことであり、そこには、自然の論理が働いている。というのである。
ここを仏法では、生死即涅槃という。人は現実に四苦、八苦の中に生きる。この苦渋に満ちた生死が即涅槃であるとの自覚に立つ時、はじめて苦しみの中にありながら、そのままそれを超脱することができるのだろう。　昭和５８年

(3)

伊那小学校職員研修の特徴の一つ、否むしろ柱として大事な読み合わせ会であるが、その真価は、学年会での読み合わせにあると思われる。学年会での読み合わせが進んでいくと、他の学年に負けてはならじとかあの学年程度はやりたいとか、対抗意識が湧いてくるのは自然のなりゆきかも知れない。・・・

このシャラ忙しい学校で、読み合わせをするという意味を言うなら、自分の殻を打ち破るということが、私にとって最大の意味となるだろうと思われる。学習指導に熱心で、うまく、仕事も速く、同好会でも熱心に活躍している者が、読み合わせ会も本腰を入れるようにみえる。また学年会でも然りであろうし、発言等も私の遠く及ばない次元からの発想に基づいていると思われる。・・・

そういう人が私の周りに居るということにおそれを感じ、驚いて、感心したりして、とてもかなわないと思う。その思いが強い程、私が私の殻をたくさん破っているように思う。　　昭和６１年

④片桐成登校長（教諭、教務そして校長と伊那小学校に１９年間勤務した。「無常」）

平成２、３、４年と３年間、この唐木先生の「無常」を読み合わせてきた。伊那小学校では、読み合わせ会の書は唐木先生のものを、が伝統となっている。この学校に赴任して初めて唐木先生のものに出会う人が多いと思う。そして、難解である。今日わかったと思うことが、明日わからなくなっている。過去に無縁であった語句が連続して出てくる。語句の意味はつかめても文脈のとらえができない。そんな３年間であったと思うが、その時々に思慮し、吾我を謙譲し、無常にふれる。それでいいと思う。それしかやりようがないし、それこそが客観的な事実であるとしかいいようがない。

読み合わせは資料作りではない。常々申し上げているように、学年会で思いを語り合い、語り尽くす。そこでの受けとめ、そこでのわからないこと、突っこみ、感動などをそのままに読み合わせ会に提示し、読み深めの契機とし、場をつくっていただけばいいのである。

徒然草の「神の干潟　遥かなれども　磯より潮の　満つるが如し」の言葉を受け止め、一日を大切にくらしていきたいと思う。　平成４年

(4)

⑤一ノ瀬健二校長（「朴の木」）

唐木順三先生の弟子のひとりである明治大学の大野先生が雪峰会（正法眼蔵を読む会）で講演された記録集を読ませてもらい、いいなあと思った。そこには、次のような話が載っていた。

唐木先生が病床に伏せっていた時、大野先生が見舞った。大野先生が師の唐木先生に向かって「西行先生のことを書こうと思っている。」このことをお話すると「あの歌は、どういう出だしだったかな。」というので「風になびく・・・」ですと答える。このやりとりもすごいと思うが、唐木先生は「風になびく　富士の煙の　空に消え　行方定めぬ　我が思いかな」とあの西行の歌をしみじみと吟じる。

その場面はただそれだけであるが、大野先生は唐木先生がこの歌をどう受け止めているかについて次のように推察しているところがいいなあと感じたのである。

それはこうである。

表面的には風になびく富士の煙が空に消えていくようにを私の思いも行方が定まらぬ不安なことよ、くらいな受けとめができるのだが、大野先生の推察では、唐木先生はそうは思っていないだろうというのである不安定とか消え入るような不安とかいうものは感じてはいなかったろうというのである。「行方定めぬ我が思い」でよいのだと受けとめる。そこまで到達した西行の大きさを感じとり、そこに唐木先生は西行との一体感を見出だしているふしが感じられるというのである。私も、この記録を読んだ時、なぜかこの考え方をすなおに受け入れることができた。

その時、風になびく富士の煙が、空に消えるのが西行の目にはすばらしいものに見えたことであろう。消えていくことに何か真実を見つけ出したのではないか。行方定めぬ我が思いもあの煙のように悠然というか風に身をまかせていくことに強い思いが湧きあがったのだと、唐木先生は受けとめているだろうと推察するのである。

私たちが、高校の国語乙で学んだころの「不安や不安定さ」でなく「これでよいのだ」と受けとめる西行の興感を発見させてもらったように思う。大野先生によれば唐木先生とはそういう人なのである。

平成６年

＊一ノ瀬校長から二代５年間⑥⑦、読み合わせ会は継続していたが、多忙等の理由から感想文集が作成されなかった。「読む」－「討論する」－「感想を書く」（自己評価する）この一連をもって読み合わせとするという大事な流れが中断したことは極めて残念なことだと思う。

(5)

⑧松田泰俊校長（教諭、教頭、校長と９年間勤務した。 「朴の木」）

・・・何故、唐木先生は「山陰」を廻ったのか。この課題が自分の中に生まれた時、思い出されたのが谷川俊太郎さんが新幹線に乗っているとき作られた『急ぐ』の詩だった。

こんなに急いでいいのだろうか 田植えする人々の上を 時速二百キロで通りすぎ 私には彼らの手が見えない 心を思いやる暇がない
この速度は速すぎて間が抜けている 苦しみも怒りも不公平も絶望もすべてながれてゆく風景 こんなに急いでいいのだろうか 私の体は速達小包 私の心は消印された切手 しかもなお間にあわない 急いでも急いでも間にあわない

・宍道湖は夕陽に映えて静かで美しく、ああ、ここにきたかいがあったと思った。
・八雲がいた七十年前はいっそう住みよい場所だったろうと思う。・・松江はひとを古風にするところがある。
・出雲大社に詣づ。・・・この建物には、言ってみれば根源的なものがある。
・日本海に初めて面々相対する。
・川に自由に遊んでいる大きな鯉をみたりした。

唐木先生の山陰の旅「出雲・石見」は「急ぐ」の詩の様と違って心を和ませてくれる。生活が回復されるような思いがする。総合学習が求めている光景に重なる。 平成１４年

⑨北原和俊校長（教諭、教務主任、校長と１３年間勤務。 「朴の木」）

過日唐木先生の「科学者の社会的責任の問題」を読み合わせた。近代において科学や技術の飛躍的発展により、人間は限りない豊かな生活を得ることができた。しかしながら、人類絶滅の可能性をはらんだ原子核エネルギーの出現によって、科学精神の自由と道徳的社会的責任という歴史的に別領域でなければならなかったものを、今は、同時に考えざるを得ないところに追い込まれているという。
唐木先生の著書を読みながら、いつも感心することであるが、何十年前に書かれたものであっても、その内容は常に今の世の現実的課題を言いあてていることである。

(6)

私は、この科学者の社会的責任を読みながら、自分自身の心の有り様または、人と人との人間関係における心の有り様が、今まさに問われている時代ではないかと思う。

お正月と言えば、私たちのこどもの頃は、友だちと一緒に作ったソリで夢中になって滑ったり、作った凧を大空高く上げて歓声を上げることに夢中でした。

しかし、今の子は、テレビの前でゲームに夢中になり、パソコンの前でインターネットで全ての用をたすような、対人との没交渉やゲーム感覚で物事を考えるような子どもたちが多くなってきているように思う。本当に憂うべき姿ではないだろうか。科学の発展が人間社会の生活を一変してしまったような感がある。・・・（中略）

今、教育基本法も改正され、教育再生会議の報告を見るにつけ、学力問題（それも狭義な意味で）だけがクローズアップされる中で、子どもたちの主体性や意欲を大切にした、ゆとり教育が問題視され、かっての詰め込み教育に戻ろうとする動きがあることは大変心配している。今のような時代こそ、先ず一人ひとりの子どもたちの心の有り様を学ぶ教育が大切である。そう感じているのは私だけであろうか。　平成１８年

①いつも問題になっていたことは、生命現象の事実を対象論理的に捉えていて、自己自身の内奥の事実として主体的に捉え得ない一点であった（ここを抜いては）教師が真に子どもを大切にするその新しい生き方が始まる。

②人は現実に四苦、八苦の中に生きる。この苦渋に満ちた生死が即涅槃であるとの自覚に立つ時、はじめて苦しみの中にありながら、そのままそれを超脱することができるのだろう。

③読み合わせをするという意味を言うなら、自分の殻を打ち破るということが、私にとって最大の意味となるだろう。

④その時々に思直し、吾我を顧識し、無常にふれる。それでいいと思う。思いを語り合い、語り尽くす。そこでの受けとめ、そこでのわからないこと、突っこみ、感動などをそのままに読み合わせ会に提示し、読み深めの契機とし、場をつくっていただけばいいのである。

⑤「行方定めぬ我が思い」でよいのだと受けとめる。
「不安や不安定さ」でなく「これでよいのだ」と受けとめる西行の眼感を発見させてもらったように思う。

⑥唐木先生の山陰の旅「出雲・石見」は「急ぐ」の詩の様と違って心を和ませてくれる。生活が回復されるような思いがする。総合学習が求めている光景に重なる。

⑦自分自身の心の有り様または、人と人との人間関係における心の有り様が、今まさに問われている時代ではないかと思う。
今のような時代こそ、先ず一人ひとりの子どもたちの心の有り様を学ぶ教育が大切である。

唐木順三先生の著書を読み合わせることをとおして、「自己への問い」「自覚」「自分の殻を打ち破ること」「時々に思慮する」「これでよいのだと受けとめる」「生活が回復される」「自分自身の心の有り様が問われている」といった人間（我）の探究がなされている。この探究は、『子どものことは、子どもに学ぶ』ということに連なることであり、伊那小教育を支える根幹の所以といえよう。また、教諭、教頭等で伊那小教育を学んでいる校長が多いことも伊那小教育を支える大きな力になっていると思われる。

□公開学習指導研究会その３０年

情操教育の研究に取り組んで１０年。昭和５４年伊那小学校は、公開学習指導研究会を始めた。『眞事』『眞言』『誠』の教育は、授業実践のなかで具現されていかなければならない。そのことを考えたとき、広く自分自身の授業を公開し、教師の支援の有り様、題材の価値の捉えなど、参観者に指摘いただくことは何よりの研鑽、研究の場であると考えたのである。

公開学習指導研究会を始めて今年度で３０回を数える。膨大なエネルギーと労力を求められる公開学習指導研究会であるが、公開学習指導研究会に向けて切磋琢磨し実践するなかで、子ども達に生き方や進路に影響を与える、また、忘れられない思い出を育んだ、多くの優れた実践が生まれ、伊那小教育を支えてきたことが、総合学習を学んだ卒業生に、その成果を求めた検証結果から伺い知ることができる。

伊那小学校で学んだ総合学習が、今の自分の生き方や進路に影響を与えたと感じていますか。

①幅広い人々、地域とのかかわりが、今の仕事で対人関係を学べた第一歩だったように思う。
②飼育中に病気、死、出産などすべての体験ができ、生き方や考え方に良い影響を与えている。
③羊の飼育がきっかけで、生物に対する興味をもつことができた。その興味が生物としの人間に移り、大学で心理学を学び、今の仕事につながった面があると思う。
④老人ホームでの交流、福祉、介護保健、老人疑似体験などで、人の役に立つことをしたい、医療現場で働きたいと思い、医療事務を学んでいる。その基になったのは総合学習があると思う。

(8)

⑤物事を追究しやり遂げる能力、解決力など今の自分の製品開発の仕事に役立っている。発想力・知恵があると会社の方から褒められる。これらは小学校での総合学習のおかげと感じている。

このように、学習活動の具体が自分の生き方や進路に影響を与えていると答えている卒業生が調査アンケート回答者の７割を数えている。

また、伊那小学校の総合学習について、「今でも覚えていること」「懐かしく思っていること」についての問いに対して、次のような回答を寄せ、伊那小教育に対する愛着のおもいを育んでいる。

①総合学習で体験したことは全て覚えている。大変な時もあったけれど、辛さは感じなかった。
②得がたい体験ができた。伊那小に子どもを通わせたい思いがある。
③毎日が楽しかった。
④学級で総合学習に取り組んだことは誇りである。
⑤伊那小は好きであった。（これからも）子どもたちの大好きな場所であってほしい。応援しています。

㈢伊那小教育その指導者

昭和５４年度の公開学習指導研究会第１回から平成２０年度の第３０回までの指導者は別紙のようである。

特徴的なのは、教育事務所の指導主事が極めて少なく、大学関係者、現場の学校長等がその殆どであることである。このことは、既存の学習指導要領に縛られがちな教育事務所の指導主事でなく、子どもの求めや願いに立った『はじめに子どもありき』の教育理論と実践を願い、指導者を求めた伊那小教育の願いの証左であり、このことも、伊那小教育を大きく支えてきたといえよう。

㈣伊那小教育その実践の題材

平成２０年度の各学級の題材名は次のとおりである。

１年　剛組『ヒツジさんといっしょ（総合学習）』
　　毅組『明ちゃん（ポニー）となかよし（総合学習）』
　　正組『せいちゃん（子牛）と正組のもうもうランド（総合学習）』
　　礼組『ヤギのれいちゃんといっしょに（総合学習）』
２年　智組『本物みたいに動く智組電車を作ろう（総合学習）』
　　勇組『くるみとなかよし（総合学習）』
　　学組『おいしい野菜を育てて食べよう（総合学習）』
　　仁組『草木染めの洋服や小物をつくろう（総合学習）』

3年　忠組『みんなでドッキリランドに宝物を残そう（総合活動）』
孝組『ありがとう　大好きな高尾公園（総合活動）』
文組『文組そばを味わおう（総合活動）』
明組『ぼくらは林大好き隊（総合活動）』
4年　山組『みんなで小屋を造ろう（総合活動）』
川組『川組の熱気球を打ち上げて見てもらおう（総合活動）』
森組『森村に、自分たちで考えた農家をつくろう（総合活動）』
泉組『みその園（ﾎﾑﾎｰﾑ）との交流会をしよう（総合活動）』
5年　春組『太鼓公演に向けて練習しよう（総合活動）』
夏組『明るくにぎやかで多くの人が集まる駅周辺を夢見て（総合活動）』
秋組『劇団パワフル秋っ子（総合活動）』
冬組『冬組のプラネタリウムをつくろう（総合活動）』
6年　謹組『乗って試そう　謹組モーターカー（総合活動）』
直組『竪穴住居で暮らそう（総合活動）』
順組『未来の天竜川について考えよう（総合活動）』
敬組『手作り和紙から学んだ生活の知恵（総合活動）』

特別支援教育
愛組『「あいあいボール」（ﾎｰﾘﾝｸﾞ）を開店しよう（生活単元学習）』<知障学級>
温組『温組亭で温組寄席をひらこう（総合活動）』<情障学級>
組1組『「宇宙かるた」を作ろう（自立活動）』<ことばの教室>
組2組『たくさん読んだり話したりできました（自立活動）』<ことばの教室>

総合学習を学んだ卒業生に、その成果を調査した検証結果のなかに『他のクラスでも楽しそうな授業をしているなという印象も残っている。』と回想している意見があったが、題材名を見ただけでも、子どもの求めや願いに立った題材の掘り起こしがされ、その活動の多様さ、興味深さを伺い知ることができると共に、全学級で取り組んでいることから、校内に感化共応の世界が醸成され、総合学習、総合活動をとおして学校全体が感情共同体となり伊那小教育を支えているといえよう。

三おわりに

伊那小学校は明治５年９月５日、現在の校舎の隣りにある古刹常圓寺に筑摩県下小学第２６小校として設立したことにはじまる一公立学校にすぎない。

校長の交代、職員の転任も他の公立学校と同様に行われている。その一公立学校である伊那小学校が、総合学習に取り組み、所謂伊那小教育をつくりあげ、支えている要素を、㈠読み合わせ　㈡公開学習指導研究会その３０年　㈢伊那小教育その指導者　㈣伊那小教育その実践の題材として考察した。

おわりに、一公立学校である伊那小学校が、総合学習に取り組み、公開学習指導研究会を立ち上げるに当たって、仏教哲学者であり卓越したリーダーであった酒井源次校長とその校長を支えた、伊那小学校著の名著『学ぶ力を育てる』(明治図書)を中心になり執筆され、また優れた実践を残された大槻武治先生、卓越した実践者溝上淳一先生などの存在があったことを忘れてはならないと思う。

また、保護者や地域の皆さんが、真摯な教育実践と子どもの育ちの姿に心寄せられ、理解と協力をくださっていることも忘れてはならない。

伊那小学校公開学習指導研究会各年度の講師　※昭和５４年度～

【平成２０年度】
◎嶋野道弘　文教大学教育学部同大学院教授
○田中光顯　前波田町立波田小学校長
○平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○藤松伸二郎　信州大学附属松本小学校副校長
○松木健一　福井大学教育地域学部教授
○赤羽郁夫　松本市教育委員会学校教育課指導室長
○畔上一豪　中野市立科野小学校教頭
○神尾敦男　千曲市立埴生小学校教頭

【平成１９年度】
◎嶋野道弘　文教大学教育学部同大学院教授
○平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○渡江寛志　信濃教育会教科書研究部部長
○松木健一　福井大学教育地域学部教授
○赤羽郁夫　松本市教育委員会学校教育課指導室長
○花岡ひさ江　坂城町立南条小学校長
○田中光顯　波田町立波田小学校長
○神尾敦男　千曲市立埴生小学校教頭

【平成１８年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○松木健一　福井大学教育地域学部教授
○牛山榮世　信濃教育会教育研究所副所長
○田中光顯　前波田町立波田小学校長
○中村芳人　信濃町立信濃中学校長
○赤羽郁夫　飯田市立遠山中学校長
○花岡ひさ江　坂城町立南条小学校長
○神尾敦男　木祖村立木祖小学校教頭

【平成１７年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○松木健一　福井大学教育地域学部教授
○牛山榮世　信濃教育会教育研究所副所長
○田中光顯　前波田町立波田小学校長
○中村芳人　信濃町立信濃中学校長
○赤羽郁夫　飯田市立遠山中学校長
○百瀬司郎　富士見町立落合小学校長
○神尾敦男　木祖村立木祖小学校教頭

【平成１６年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○松木健一　福井大学教育地域学部教授
○牛山榮世　信濃教育会教育研究所副所長
○荒井英昭　前上田市立清明小学校長
○田添荘文　岡谷市立小井川小学校長
○諏訪博　辰野町立辰野東小学校長
○赤羽郁夫　南信濃村立遠山中学校長
○神尾敦男　木祖村立木祖小学校教頭

【平成１５年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○中村芳人　信州大学附属長野小学校副校長
○田添荘文　岡谷市立小井川小学校長
○牛山榮世　信濃教育会教育研究所副所長
○諏訪博　辰野町立辰野東小学校長
○荒井英昭　前上田市立清明小学校長
○大槻武治　箕輪町教育委員会教育長
○松木健一　福井大学教育地域学部教授

【平成１４年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○嶋野道弘　文部科学省初等中等教育局視学官
○田中光顯　波田町立波田小学校長
○牛山榮世　信濃教育会教育研究所副所長
○清上淳一　前箕輪町立箕輪北小学校長
○中村芳人　信州大学附属長野小学校副校長
○大槻武治　箕輪町教育委員会教育長
○諏訪博　辰野町立辰野東小学校長
○松木健一　福井大学教育地域学部教授

【平成１３年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○嶋野道弘　文部科学省初等中等教育局視学官
○布谷光俊　愛知教育大学生活科教育講座教授
○松木健一　福井大学教育地域学部教授
○中島一彦　伊那教育事務所指導主事
○松田泰俊　駒ヶ根市立赤穂中学校長
○片桐成稔　駒ヶ根市教育委員長

【平成１２年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○布谷光俊　愛知教育大学生活科教育講座教授
○松木健一　福井大学教育地域学部助教授
○小野玲子　伊那教育事務所指導主事
○清上淳一　箕輪町立箕輪北小学校長
○松田泰俊　駒ヶ根市立赤穂中学校長

【平成１１年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○小松恒夫　東京学芸大学非常勤講師
○布谷光俊　愛知教育大学生活科教育講座教授
○松木健一　福井大学教育地域学部助教授
○清上淳一　南箕輪村立南部小学校長
○松田泰俊　駒ヶ根市立赤穂中学校長
○有賀秀樹　松本教育事務所指導主事

【平成１０年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○小松恒夫　東京学芸大学非常勤講師
○松田泰俊　駒ヶ根市立赤穂中学校長
○清水毅四郎　滋賀大学教育学部教授
○布谷光俊　愛知教育大学生活科教育講座教授
○松木健一　福井大学教育地域学部助教授
○畠山信重　伊那教育事務所指導主事

【平成９年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○布谷光俊　信州大学教育学部助教授
○清水毅四郎　滋賀大学教育学部教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○松田泰俊　駒ヶ根市立赤穂中学校長
○小林正桂　伊那教育事務所主任指導主事
○高坂敏昭　伊那教育事務所指導主事

【平成８年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○布谷光俊　信州大学教育学部助教授
○清水毅四郎　滋賀大学教育学部教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○山岸建文　伊那教育事務所指導主事
○森川一成　伊那教育事務所指導主事
○高野音　伊那教育事務所指導主事

【平成７年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○布谷光俊　信州大学教育学部助教授
○清水毅四郎　滋賀大学教育学部教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○大槻武治　前辰野町立辰野西小学校長
○岡田真　伊那教育事務所指導主事

【平成６年度】
◎平野朝久　東京学芸大学教育学部教授
○布谷光俊　信州大学教育学部助教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○青木暉和　更埴市立埴生小学校長
○清水毅四郎　滋賀大学教育学部教授
○岡田真　伊那教育事務所指導主事

【平成５年度】
○川田稚　山梨医科大学教授
○平野朝久　東京学芸大学教育学部助教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○清水毅四郎　滋賀大学教育学部教授
○原田孝　伊那教育事務所指導主事
○小沢貞義　伊那教育事務所指導主事

【平成４年度】
○平野朝久　東京学芸大学教育学部助教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○本山秀郎　三郷村立三郷小学校長
○清水毅四郎　信州大学教育学部助教授
○丸山隆雄　伊那教育事務所指導主事
○宇治橋克彦　伊那教育事務所指導主事

【平成３年度】
○平野朝久　東京学芸大学教育学部助教授
○本山秀郎　三郷村立三郷小学校長
○清水毅四郎　信州大学助教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○山本紘子　伊那教育事務所指導主事
○北島征朝　伊那教育事務所指導主事
○市村尚人　伊那教育事務所指導主事

【平成２年度】
○平野朝久　東京学芸大学教育学部助教授
○大槻武治　駒ヶ根市立東中学校長
○布谷光俊　信州大学教育学部助教授
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○有賀寛　前宮田小学校長
○斉藤誠吾　伊那教育事務所指導主事
○伊藤勝光　伊那教育事務所指導主事
○市村尚人　伊那教育事務所指導主事

【平成元年度】
○平野朝久　東京学芸大学教育学部助教授
○大槻武治　駒ヶ根市立東中学校長
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○清水毅四郎　信州大学教育学部助教授
○小池守雄　伊那教育事務所指導主事
○藤森健郎　伊那教育事務所指導主事
○西沢健仁　伊那教育事務所指導主事

【昭和６３年度】
○水谷富保　三郷村教育委員会教育長
○有賀寛　宮田小学校長
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○清水毅四郎　信州大学教育学部助教授
○村田弘之　伊那教育事務所指導主事
○宮田光雄　伊那教育事務所指導主事
○藤森健郎　伊那教育事務所指導主事

【昭和６２年度】
○小松恒夫　東京都日野市教育委員
○水谷富保　三郷村教育委員会教育長
○有賀寛　宮田小学校長
○清水毅四郎　信州大学教育学部助教授
○村田弘之　伊那教育事務所指導主事
○宮田光雄　伊那教育事務所指導主事
○藤森健郎　伊那教育事務所指導主事

【昭和６１年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○小松恒夫　元週刊朝日編集長
○水谷富保　三郷村教育委員会教育長
○青木昭清　坂城中学校長
○青木輝和　更埴市立埴生小学校長
○三村洋　伊那教育事務所指導主事
○丸山茂彦　伊那教育事務所指導主事

【昭和６０年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○小松恒夫　元週刊朝日編集長
○水谷富保　三郷村教育委員会教育長
○青木昭清　坂城中学校長
○西村寛人　県教委教学指導課指導主事
○青木輝和　伊那教育事務所指導主事
○中島鑑　伊那教育事務所指導主事

【昭和５９年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○小松恒夫　元週刊朝日編集長
○水谷富保　三郷村教育委員会教育長
○下起悦司　南木曽中学校長
○松村好雄　松本市立清水中学校長
○西村寛人　県教委教学指導課指導主事
○中島鑑　伊那教育事務所指導主事

【昭和５８年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○小松恒夫　元週刊朝日編集長
○水谷富保　三郷村教育委員会教育長
○村松淳　岡谷市立長地小学校長
○松村好雄　松本市立清水中学校長
○三村喜一　神坂小学校長
○浜本俊輔　伊那教育事務所指導主事
○佐藤明次　伊那教育事務所指導主事

【昭和５７年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○北村洋　伊那教育事務所指導主事
○松村好雄　塩尻市立塩尻西小学校長
○伝田磐　伊那教育事務所学校教育課長
○村松淳　岡谷市立長地小学校長
○宮本博雅　伊那教育事務所指導主事
○下條周信　伊那教育事務所指導主事
○浜本俊輔　伊那教育事務所指導主事

【昭和５６年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○松崎貞良　前ヤコブ幼稚園長
○篠原菊弥　諏訪市立高島小学校長
○松村好雄　塩尻市立塩尻西小学校長
○小松好文　飯島町立飯島小学校長
○伝田磐　伊那教育事務所学校教育課長
○中沢光治　県教育委員会体育課係長
○長沼清彦　鼎町立鼎小学校長

【昭和５５年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○松村好雄　塩尻市立塩尻西小学校長
○高野勇夫　伊那教育事務所学校教育課長
○小松好文　飯島町立飯島小学校長
○下起悦司　南木曽中学校長
○篠原菊弥　諏訪市立高島小学校長
○長沼清彦　鼎町立鼎小学校長

【昭和５４年度】
○三枝孝弘　名古屋大学教育学部教授
○松村好雄　塩尻市立塩尻西小学校長
○高野勇夫　伊那教育事務所学校教育課長
○小松好文　県教育委員会教学指導課指導係長
○篠原菊弥　諏訪市立高島小学校長